

保育者養成における実習カリキュラムを再考する (I)

—日米の保育者養成校付属施設における共同研究の一試みを通して—

Reflection on the Teaching Practice Curriculum in the Preschool Teacher Training

—Through a joint research project between Japanese and US Laboratory Schools—

立浪 澄子 TACHINAMI sumiko

はじめに (研究の目的)

保育者養成といえば、現状では幼稚園教諭・保育所保育士の養成を意味することが多い。本稿でも特に断らない限り便宜的にこの意味で「保育者養成」という用語を使用する。理由の一つは、その職務の内容にかかわらず日本ではこの両者を包含した形態での養成がこれまでも多く行われてきたのであり、近年その傾向はますます強まっているからである。もう一つは、保育士の職場として現実には保育所がその圧倒的多数を占めており、筆者の問題意識も主として幼稚園・保育所の保育者養成にあるからである。

筆者は過去20年以上にわたって幼稚園教育実習の指導を中心に保育者養成に携わってきた者であるが、その中で、保育者養成において実習が占めるべき役割の大きさや可能性の豊かさを考えさせられることが少なくなかった。今般、保育者養成に関する日米比較研究に携わる機会を得たことをきっかけに、筆者が携わってきた本学における幼稚園教育実習を素材として保育者養成における実習の今後のあり方を検討することにしたい。

I 日本の保育者養成における実習カリキュラムの歴史、現状とその課題

1、日本の保育者養成カリキュラムにおける実習の位置づけと内容の概観

(1) 戦前における実習の変遷

わが国の保育者養成は1878(明治11)年2月、当時の東京女子師範学校附属幼稚園が2人の見習い保姆¹を受け入れたことに始まる。見習い生の一人氏原銀がその内容を「保姆見習生ノ学科ハ、幼児在園中ハ実地保育ノ練習ヲナシ、保育時間後ハ音楽唱歌和琴、恩物ノ理解、保育ノ理論(口授筆記)、幼稚園記講義、恩物ノ製作ニシテ(後略)」(傍点筆

者)²と述べているように、実習については当初から養成の中で最も多くの時間が割かれていた。

その後、戦前の幼稚園保姆養成は主として各地の女子師範学校、または私立の保姆養成所で行われてきた。

保育所保姆については、戦前は公的な規程がなく、資格の有無は問われなかった。専門的な養成施設も長く未設置のまま、昭和に入ってわずかに小規模なものが見られる程度であった。³

戦前の保育者養成を振り返れば、実習は初期には「実地保育」と称され、保育者養成の根幹を成すものであったと言ってよい。このことは揺籃期の幼稚園の多くが保育と同時に保育者養成も行い、保姆免許状を発給していたことから窺える。⁴ その後も、各地に女子師範学校が設置されてからは「便宜」としてではあったが「保育実習」が課されており⁵、多くの保姆養成所のカリキュラムでは実習の比重が最も高かった。⁶

さらに、当時は無資格保姆も少なくなかったが、各府県では保姆の検定を行っており、この検定を受けることによって免許を得ることもできた。その場合も、受検資格においてすでに少なくとも1年以上の幼稚園での保育経験が必要とされていた。⁷

なぜこのように実習が保育者養成の根幹たりえたかといえば、初期においては養成の主眼が恩物の意義とその用法、唱歌や遊戯、談話の習得にあり、それらは幼稚園の日々の保育において実地に学ぶのがもっとも確実であると同時に、その指導者は当時幼稚園保姆以外に求めるすべはなく、保姆は日々の保育に追われていたからであると思われる。

(2) 戦後における幼稚園教育実習の変遷

戦後の保育者養成は形の上では幼稚園教諭と保母に明確に切り離されてスタートした。幼稚園教諭になるためには幼稚園教諭普通免許状が必要となり、1949(昭和24)年、教育職員免許法とその関連規

則によって、小・中・高の教員と同等に大学卒を原則として免許状が授与されることになった。

しかし当時実際に幼稚園教諭養成を行う4年制大学は限られており、短期大学か指定教員養成機関としての各種学校が中心であった。1960年代から4年制大学における本格的な幼稚園教諭養成が広がってくるが、今日なおその主力は2年制の養成機関である。

教育実習についての規程が認定基準として定められたのは1954（昭和29）年であった。このとき「教職に関する専門科目」（4年制大学卒一級25単位、短大卒二級20単位）のうち「教育実習」は幼稚園の場合、一級、二級ともに4単位と定められた。⁸これを仮に4週間の実習と受け止めれば、戦前師範学校のおよそ8週～10週、1943（昭和18）年4月師範学校令が改正され、教育実習12週、そのうち2週間は保育実習として女子の必修となったのに比べると実習の大幅な縮小と言える。

このように戦後教育実習が縮小された背景には、戦前のそれは「養成の総仕上げ」的色彩が強く、藤枝のいう「アプレントイス型」（apprentice 徒弟）の傾向が強かったが、戦後は「理論と実践の結合の上に立った教育研究を充実・発展させる場」としてとらえる、すなわち「リサーチ型」（research 研究）への転換があったからであると考えられる。⁹

戦前の教育実習はたとえば小学校の場合、明治43年の「師範学校教授要目」（文部省訓令第13号）¹⁰に見られるように「模範教授の参観と説明→教授草案の調製→実地授業（教生として観察）→指導教員の論評」が主であり、他に「管理訓練」や「研究問題」等もあったが、養成の総仕上げとして通常は最終学年において実施され、いわば「路上講習」とでもいうべきものであった。

戦後になって、主としてCIE（アメリカ民間情報教育局）の指導に学んだ、教育実習とは「観察（Observation）、参加（Participation）、実習（Prac-

tice Teaching）を通して教育理論の構成に到達せしめる過程」¹¹であるべきだという理論が出て、教育実習の捉え方は大きく転換した。

この二つの捉え方は紆余曲折をへながらも現在もなお十分な決着は見えていないといえるだろう。このような動向を反映してか、1988（昭和63）年、教育実習は「事前・事後指導」1単位が増加され、5単位必修となった。

その後まだ制度的な変化はないが、内容面において、これまでになかった「預かり保育」「低年齢児保育」「子育て支援」等が新たに加わりつつある。

(3) 戦後における保育実習の変遷

保育士の場合、戦前はその養成方法についての規程は見られなかったが、戦後は児童福祉法施行令（政令、昭和23.3.31）において「児童福祉施設において、児童の保育に従事する女子」と規定され、保母（当時）養成施設の卒業者と保母試験の合格者にその資格証明書が与えられることになった。¹²このとき保育士養成施設の原型ができたといえるが、それはおおむね「高校卒業または同程度の者」を入学対象とする「修業年限2年」の「学校その他の施設」であった。¹³

実習に関しては「保育、育児、看護、教護、栄養、音楽遊戯、お話、絵画、製作等に関する研究及び実習を所長の指定する、児童福祉施設病院保健所等において保母実習生として行うこと」とされ、配当は「所長の定めるところ」とされていた。しかし当時養成校は全国に5校を数えるのみであり、大部分は保母試験による資格取得であった。¹⁴

保育実習の具体的内容が固まったのは1952（昭和27）年であり、そのときの厚生省告示によれば、実習は「甲類、総合実習、20単位」であった。甲類とは必修を意味し、1単位の实習は45時間を基準としたので900時間の実習が必須であった。1日を9時間（1時間＝45分）と換算すると100日に及

ぶ。¹⁵しかし、これは明確な基準ではなかったので実際にどの程度の実習日数が確保されたかはつまびらかでない。

その後、1962（昭和37）年10月より保母養成課程は修業教科目・単位数と合わせて方法も厚生大臣の指定するところとなり、実習は大幅に削減され「保育実習（実習）10単位」¹⁶となった。その内訳は「2以上の施設にわたる保育所実習4単位、養護施設を含め2以上の種別にわたる収容施設実習4単位、これらのいずれか選択した施設実習2単位」¹⁷であった。さらに幼稚園教諭との同時養成を容易にするため「幼稚園教諭の養成を併せ行なっている養成所では、教育実習4単位の履修をもって、保育実習にかえることができる」¹⁸ようになった。この結果、幼稚園教諭免許状と保母資格の同時取得者が飛躍的に増大することになった。

1970（昭和45）年9月の改定では実習期間はさらに削減され、「保育実習Ⅰ」（保育所2単位、収容施設2単位、計4単位、180時間・必修）、「保育実習Ⅱ」（保育所2単位90時間・選択）、「保育実習Ⅲ」（収容施設、通所施設2単位90時間・選択）となった。保育実習Ⅰにおける施設実習は3以上の収容施設での実習に拡大され、幼稚園実習の保育実習への読み替えは廃止された。¹⁹

1991（平成3）年の改定では、保育実習に際しての事前及び事後の指導のための単位が1単位増となった。さらに2001（平成13）年より保育実習Ⅱと保育実習Ⅲのいずれかが選択必修となって現在に至っている。

このような保育士養成カリキュラムにおける保育実習の変遷をたどってみると、日本の保育実習には次のような特徴が指摘できる。

- ①保育所実習とその他の収容施設等の実習にその性格が二分されている。
- ②実習は養成開始期には大きな比重を占めていたが、多種類の施設での実習が基本であり、1箇

所でじっくりと取り組める実習ではなかった。

- ③その後、実習単位は減少の一途をたどっていたが、近年漸増傾向にある。

(4) 保育者養成研究者による実習カリキュラム研究の概観

梅田（2002）の研究によれば、1989（平成元）年～2001（平成13）年までの日本保育学会研究論文集に見られる実習及び事前事後指導に関する発表論文は180である。そのうち「事前事後指導のあり方」に関するものが約半数を占めており、ついで「実習生の子ども理解を深めていくための方法」や「実習の評価にかかわる内容」「実習に関する意識調査」が多いという。²⁰

これはちょうど事前事後指導が開始された直後であるという时期的な影響もあろうが、実習に関して養成校がもっと積極的にかかわるべきであるという養成研究者自身の問題意識の表れでもあろう。

日本保育学会や全国保育士養成協議会その他で実習に関する研究は盛んであり、近年は事前事後指導のためのテキストの出版点数も少なくない。しかしそこに述べられている実習の問題点や課題を見ると、すでに日名子（1968）が指摘しているところからほとんど進展していないと言ってよいのではないだろうか。²¹

坪井（2004）は最近の研究動向から保育の特徴を「身体知」（身体を通して知る、感じること）ととらえ、実習を「身体技法としての学び」ととらえる視点から実習の意義を論じている。²² 保育とその「学び」としての実習の新しい捉え方として、今後このような視点からの研究がさらに要請されてくると考える。

- (5) 日本の保育者養成キュラムにおける実習の特徴及び実習指導の成果、問題点と課題
以上、ざっと概観しただけだが、日本の保育者養

成は2年課程の養成が主であること、さらに幼稚園教諭免許状と保育士資格の同時取得が多数派であること、しかも保育士資格は保育所だけでなく他の児童福祉施設の保育士にも広く適用されており、その内容がきわめて広範であることなどがその特徴としてあげられよう。

その結果、実習の基準は現在幼稚園5単位（事前事後指導を含む）、保育士必修5単位（保育所、施設、事前事後指導を含む）、選択必修2単位（保育所又は施設）となっており、きわめて限られた期間に多種多様な実習を何回も実施しなければならないのが多くの養成機関の実情である。しかもいずれも1～4週間程度の短期間の実習が多く、「やっと慣れたと思ったら、もう終わり？これからだったのに。」という実習生や指導者の声は少なくない。

少し年代は古いがある調査によれば、保育園（所）長が「実習に必要な日数」としてあげているのは、「観察実習7.2日、参加実習9.0日、責任実習9.1日、計25.1日」だという。²³これは現行の10日間（必修）、選択必修を加えても20日間の保育所実習とはなお開きがある。実習期間の延長は古くから指摘されている大きな課題である。

II 諸外国の教育・保育実習

1、徒弟的養成

まず、保育制度がもっとも早くから発達したヨーロッパであるが、EU連合が成立した現在でも、その制度は各国によって少しずつ異なっている。

幼稚園教師は小学校教師と同等とみなされている例、保育所保育士とともにその専門性が認知されている例、幼稚園教師と保育所保育士の養成制度がはっきり別れている例など多種多様である。²⁴それは、どの国においても乳幼児のための教育・保育はなかなか社会の義務とはなりえず、その生成と発展を個人的努力にたよってきた時代が長かったからといえ

るだろう。

おそらくそのためであろうとおもわれるが、保育者養成は長い間現場を中心として行われ、19世紀までは徒弟制度に近い形が続いてきた。これはアメリカなども同様であった。²⁵

したがって、たとえばイギリスの場合、1980年代においても養成期間の40%が実習に当てられている例²⁶など、実習は日本よりもはるかに長期間にわたる例が多い。

養成の世界史的な流れを見ると、日本のかつての徒弟的な養成が必ずしも日本固有のものではなかったことがわかる。

2、免許制度の発展

現在、北米のいくつかの州、あるいはヨーロッパのいくつかの国では、幼稚園教員養成は小中学校教員養成と結びついて行われている。たとえば、梶（2004）によれば、アメリカ・カリフォルニア州では教員免許は「全科」、「単科」、「特殊教育」「職業教育、他」に分かれ、幼稚園教師の免許は「全科」（K-第12学年。日本流に言えば、幼稚園年長児～高3）に分類される。この免許を取得するには学士以上の学歴と実習を含む教職課程の修了が要件とされている。しかもこの免許は5年ごとの更新制と、就職後も研修と経験を積むと等級が上がっていく上進制を伴っている。

また同州においては、K（Kindergarten 幼稚園の意）以上の学童保育とプレK（3～4歳）の保育プログラムに従事するには"Child Development Permit"と呼ばれる「保育許可証」（ただし6段階に分かれている）が必要である。この許可証も教員免許より取得要件は低いが、同じく更新性と上進制を伴っている。²⁷

教育要件が職位とストレートに結びつくシステムがどの国でもすぐ有効に機能するかどうかは慎重に検討されなければならないだろう。ただ、カリフォ

ルニア州の場合、免許取得にかかわるいずれの段階でも実習または経験が義務付けられており、経験(実習)と教育が連動して上進していく点は養成システムとして優れた点であると考えられる。

Ⅲ、長野県短期大学幼児教育学科における幼稚園教育実習の概要と課題—学生の授業評価と実習レポートに見る実態(平成16年度入学生の場合)から

1、実習計画の概要

長野県短期大学では幼稚園二種普通免許状を取得できる教員養成(学生数44名)を行っている。学科卒業後、専攻科(1年制)に進学し所定の単位を習得すれば、保育士資格を取得する道も開かれている。

(1) 付属幼稚園実習 表1参照 1グループを除いて大半は通常授業と平行して開講している。スケ

表1 付属幼稚園実習 学生の配属内訳とスケジュール(2004年度入学生)

	配属クラス / 期間	つくし組 (3歳児) (園児15、 担任1)	すみれ組 (3歳児) (園児15、 担任1)	すずらん組 (4歳児) (園児30、 担任1)	ひまわり組 (5歳児) (園児30、 担任1)
1	8/24(火) ～ 9/7(火)	2 (実習生 人数)	2	2	2
2	9/21(火) ～ 10/6(水)	2	2	2	2
3	11/8(月) ～ 11/24(水)	2	2	2	2
4	11/26(金) ～ 12/10(金)	2	2	2	2
5	1/11(火) ～ 1・25(火)	2	2	1	2
6	2/8(火) ～ 2/23(水)	1	1	2	1

ジュールは表1の通りである。

1クラスに1～2名の配属でゆとりがあるといえるが、授業と平行して行われているので、個人で補習をするよう指導はしているもの、実習期間中は授業を欠席せざるを得ないのが現状での大きな問題である。(平成18年度からは同時開講停止)

(2) 外部幼稚園実習 2年次 6月 2週間 一斉集中実習

外部幼稚園実習は2004(平成16)年度入学生の場合、下記の通りであった。

①期間 平成17年6月6日(月)～6月18日(土)2週間

②実習先 県内幼稚園 33園(2名配属の園が4園あった。)

県外幼稚園 7園

公立幼稚園 4園、私立幼稚園 36園

2、実習の具体的内容の概要

付属幼稚園では実習時期によって多少の内容的違いはあるが、基本的に1週目は観察と観察レポートの記入、2週目に観察・参加実習に加えて部分担任実習各自1回(指導案作成)と実習日誌の記入がある。かつては考えられなかったが、最近指導案や実習日誌の提出が期限に間に合わない学生がいることがあり、今後、その理由や改善策を調べる必要があると思われる。

2004(平成17)年度入学生の外部幼稚園実習の具体的実習内容については表2に示すとおりであった。

表2 外部実習内容

実習の内容 (10日間)	観察 参加	部分 担任	全日 担任	計	指導案 (部分)	指導案 (全日)	指導案 (週案)
一人 当たり 平均 (日数)	4.41	4.20	1.43	10.05	3.09	1.39	0.07

配属方法は県内・県外（県内においては一部の幼稚園を除く）ともに、原則として学生が1年次に個別に実習依頼を行い、内諾を得た後、大学から文書依頼を行っている。

本学では実習依頼は学生主体で行っており、依頼活動からすでに実習はスタートしているという認識を持っている。

3、実習に対する学生の授業評価の内容（アンケート調査の集計）

本学では開講科目について前後期の2回、学生に対する授業評価を実施しているが、教育実習に対しては行われていない。そこでアンケート項目を実習向けに一部改訂し、筆者の責任で2004（平成16）年度入学生に対し学生による実習評価を実施した。附属幼稚園実習については2年次4月全員の実習が終了した後、外部幼稚園実習に対しては2年次6月、実習終了1週間以内に実施したところ、結果は表3の通りであった。アンケート内容の紹介は省略する。

表3 学生による幼稚園教育実習の評価

受講者（附属45名、外部44名）、回収数（附属45部、外部41部）、評点（5点満点）、評点平均は両者の評点の平均を示している。

その1

評価項目	評点平均
(2) 指導教諭の実習指導に対する熱意	4.46
(3) 指導教諭の指導のわかりやすさ	4.52
(4) 指導教諭の実習日誌の指導のわかりやすさ	4.42
(5) 指導教諭の子どもに対する指導	4.66
(6) 質問に対する指導教諭の指導	4.60
(7) 学習意欲の高まり	4.67
(8) 学生の力に合わせた指導教諭の指導	4.53
(9) 新しい考え方や知識の吸収	4.72
(12) この実習の総合的評価	4.46

その2

この実習でよいと思う点（複数選択可、割合平均は回収数に対する回答数の割合の平均を示している。）

評価項目	割合平均
① 幼児に対する援助や指導の実際（言葉かけ等）が的確でとても参考になった	80.2%
② 保育のポイントがよく分かる	29.1%
③ 幼児に対する指導内容が幼児の興味や発達段階に合っており、深みや広がりを感じる	67.4%
④ 環境構成がよく工夫されており、非常に参考になった	38.4%
⑤ 基礎的なところから説明してもらったので分かりやすかった	29.1%
⑥ 実習生への指導や説明が具体的に意図がよく理解できる	48.8%
⑦ 指導案や実習日誌の書き方の指導が丁寧で分かりやすい	46.5%
⑧ 指導教諭は保育に対して熱意が感じられる	81.4%
⑨ 園全体が協力的で実習生が溶け込みやすい雰囲気がある	37.2%
⑩ 指導教諭の人柄に親しみが持て、相談しやすい	51.2%
⑪ その他	0.0%
無回答	0.0%

その3

この実習で改善した方がよいと思う点（複数選択可、割合平均は回収数に対する回答数の割合の平均を示している。）

評価項目	割合平均
① 幼児への援助や指導の実際が不明瞭で疑問をもつことが多かった	3.5%
② 指導教諭の保育のポイントがどこにあるか不明のときが多かった	1.2%
③ 幼児に対する指導内容が増え季節で平板な印象を持つことが多かった	1.2%
④ 環境構成が保育内容に合っておらず、準備不足が目立った	1.2%
⑤ 実習生への説明が行き当たりばったりで、理解しにくかった	7.0%
⑥ なぜ注意されるのか理由が分からないこともあり、対応に苦慮した	3.5%
⑦ 指導案や実習日誌の書き方の指導がほとんどなかったり、あっても一方的でよく分からなかった	14.0%
⑧ 指導教諭は保育に対し熱意が感じられなかった	0.0%
⑨ 園全体が非協力的で、実習が溶け込むのにとっても苦労した	2.3%
⑩ 指導教諭の人柄に親しみが持てず、相談しにくかった	4.7%
⑪ その他	1.2%
無回答	70.9%

表3によれば、学生による教育実習の総合評価は4.46であるが、これは全学の評価実施科目の総合評価の平均3.92(2004年度前後期平均)と比較すれば大変高い数値である。²⁸ これを見る限り、評価項目に若干の違いがあるのですぐさま比較はできないものの、一応教育実習は学生の満足度が高いと推定される。学生のニーズに合った科目であることがわかる。

ただ、学生の自己評価に関しては附属幼稚園実習が1.91、外部幼稚園実習が4.34であり、対照的な結果になっている。これは今のところ附属幼稚園実習が1年次で最初の実習であることが影響しているのではないかと仮定しているが、本格的な理由の解明は今後の検討課題である。

4、学生のレポートの内容から

2年次の外部幼稚園実習に際し、前もって「幼児教育課程論」の評価資料の一つとして、次のレポート課題を課した。

テーマ「教育実習における指導計画の作成・実施・評価の経験とその考察」(サブタイトルは自分でつける)

分量は原稿用紙で少なくとも10枚程度を要求した。その結果をまとめたものが表4である。

表4 指導計画作成・実施・評価レポート(2004年度入学生)よりサブタイトルの内訳

サブタイトル	配属クラス
指導計画の意義	
指導案の大切さ	縦割り
保育における指導計画の役割	3歳児
指導計画の大切さ	4歳児
指導案の役割	混合
指導案の存在と臨機応変な対応	3歳児
外部実習における指導案の計画から実践	4歳児

子ども中心の指導案を作成するためには	5歳児
事前に深く計画することの大切さ	4歳児
思い通りにはいかないもどかしさ	4歳児
子ども理解	
予想される幼児像と実際の幼児との違い	5歳児
3歳児の反応を通じて	3歳児
3歳児のクレヨンの使い方に表れる個性と、絵本・紙芝居の選び方の重要性	3歳児
子どもたちが活動を楽しむための要素	3歳児
活動の研究	
活動開始から終了まで楽しさを持続させることの大切さ	3歳児
活動を行う時に、子どもが主体となるように	4歳児
主活動を通して学んだこと	3歳児
子どもが楽しめる活動を考える	3歳児
子どもにとってやりやすいものを	4歳児
目に見えない教材研究の大切さ	縦割り
制作活動を通して知った子ども目線に立った教材研究の大切さ	4歳児
環境構成	
友だち同士で育ち合える環境づくり	5歳児
指導の方法	
子どもの側に立って考えること・指導する保育者の援助の大切さ	5歳児
急な予定変更に対応する難しさ	混合
臨機応変に保育をする	3歳児
指導における言葉かけの重要性	混合
やってみなければわからない!臨機応変に対応しよう	4歳児
子どもたちが楽しんで活動できるように大切な保育者のかかわり	5歳児
子どもの立場になって考える	4歳児
子どもの立場で考えた説明の重要性	5歳児
自分の伝えたいことは何?	4歳児
ねらいを大切に、『やらせる』保育から『子どもの姿から学ぶ』保育へ	縦割り
子どもの視点に立ち、一人一人を考えた対応の大切さ	5歳児

それぞれの子どもに合った指導を	5歳児
たくさんの子どもの姿を予想し、子どもの気持ちに沿う	4歳児
子どもたちをよく知る事の大切さ	5歳児
自己課題	
自分で失敗し、模索し、自分の経験が自分の財産になる	4歳児
実際にやってみてわかったこと、言われてわかったこと	5歳児
子どもの実際の姿から分かった自分に足りていなかったこと	5歳児
経験することでしか学べないこと	4歳児
外部実習で経験し、学んだこと	4歳児
全日実習の経験から学んだこと	4歳児
その他	
記入なし	4歳児
記入なし	4歳児

レポートの平均枚数は11.1枚で、サブタイトルは指導の方法にかかわるものが多かった。自分で立てた指導計画のねらいの妥当性や題材の選び方、指導の手順や効果的な導入の方法などが反省や考察の直接的なテーマとなっている。なかでも具体的な場面での指導の方法が学生の実習上の大きな関心事項である。しかし本来はもっと題材や活動の選択、指導の計画性などが検討されるべきではないかと思われるが、このような点への関心はあまり高くない。

IV ミルズ大学附属チルドレン・スクール（アメリカ・カリフォルニア州・オークランド。以下MCCSと略称を用いる）内のプリスクールにおける保育実習の概要とその成果—2回の保育観察と学生のレポートから

1、MCCSとMCCSにおける実習の概要

ミルズ・カレッジはアメリカ・カリフォルニア州・オークランドにある私立女子大学である。創立は

1852年、大学として認可されたのは1885年。現在は七百余名の学部生（女子のみ）、四百余名の大学院生（男女共学）が通うリベラル・アーツ・カレッジである。²⁹

教育系大学院では教育学修士の学位とK以上の初等教員、初等特別支援教員、チャイルド・ライフ・スペシャリスト³⁰（ヘルスケアを受けている子どもやその家族を支援する専門家）の養成プログラム、「保育許可証」取得プログラム（第4段階の主任教諭レベル。このプログラムは学部レベルでも実施している。）を実施している。

そのカリキュラムのうち、本論とのかかわりで注目したいのはMCCSでの教育実習である。この教育実習は「Theory and Practice of Early Childhood Education（初期教育の理論と実践）」の一部として行われ、上記学位、資格を得るためには必修の課目となっている。（注：アメリカでは通常Early Childhoodは0才～8才の乳幼児・児童期を指すので、ここでは「初期教育」と訳した。）

MCCSは1926年、最初はプリスクール（3～4歳）として出発した。アメリカ西海岸地方では最古の大学付属実験学校である。その後1980年に乳児クラス（0～2歳）、1981年に幼稚園（5歳）、1991年に3年生までの初等課程、1996年にゼラニューム・クラス（3～4歳混合）、2000年に4.5年生のクラスができ、現在は生後3ヶ月から初等課程の5年生までの乳幼児・児童を保育・教育している。

その概要³¹を長野県短期大学附属幼稚園実習と比較したものが表5である。

ここで注意しておきたいのはアメリカの就学年齢の理解のしかたである。アメリカでは1年制の幼稚園入園から就学とされるのが一般的であるが、その対象は「12月2日以前に5歳の誕生日を迎える、あるいは9月1日以前に4歳9カ月に達している児童」とされることが多い。カリフォルニア州の場合も同様で、日本流に言えば、4月～11月生まれの子

表 5 長野県短付属幼稚園と MCCS の実習の比較

名称	長野県短期大学付属幼稚園	ミルズ・カレッジ・チルドレンズ・スクール (プリスクール)
創立	1965	1926
関連学科	幼児教育学科	教育学部 (Department of Education)、教育系大学院
クラス数と定員	3歳児 (3歳~3歳11ヶ月) 2 各15人 4歳児 (4歳~4歳11ヶ月) 1 30人 5歳児 (5歳~5歳11ヶ月) 1 30人 計4クラス 90人 *年齢は4月2日時点	異年齢混合 (2歳半~5歳) 17人 乳児 (3ヶ月~2歳半) 17人 年少幼児 (2歳3ヶ月~4歳5ヶ月) 17人 年長幼児 (4歳半~4歳11ヶ月) 20人 幼稚園~1年生 (5歳~7歳) 20人 2~3年生 (7歳~9歳) 20人 4~5年生 (9歳~11歳) 20人 計7クラス 131人 *年齢は9月2日時点
保育時間	9:00~15:00 (月~金) *時期によって変動がある	混合 (8:30~15:30、毎日、週3日、週2日) 乳児 (8:30~12:00、15:30または17:15、毎日) 年少幼児 (8:30~12:00、15:30または17:15、毎日) 幼稚園~1年生 (8:30~14:00) 2年生以上 (8:30~15:00) *幼稚園以上には学童保育クラスがある (7:45~8:30、14:00~17:15)
教員・職員配置	園長 (併任) 1 主任教諭 (専任) 1 クラス担任 4 (各クラス 1) 事務 (嘱託) 1 計 7	校長 (併任) 1 研究教育主任 (併任) 1 クラス担任 P 11 (午前4クラス 各1、午後クラス 3) 初等部3クラス 各1、 学童保育 1 体育、音楽、美術 (非常勤) 各1 事務 2 計 18 (専任14、併任1、非常勤3)

保育費用	2005年度 入園料 31,300 円 保育料 年額 222,000 円 (月額 18,500 円) 教育活動費 年額 12,000 円 諸費 月額 1,000 円程度) PTA 会費 年額 6,000 円	2005～2006 (年額) Ge 8:30～3:30 火木 3,256 ドル Ge 8:30～3:30 月水金 4,885 ドル Ge 8:30～3:30 月～金 8,141 ドル Pre 8:30～12:30 月～金 4,905 ドル Pre 8:30～3:30 月～金 8,741 ドル Pre 8:30～5:15 月～金 10,652 ドル K/18:30～2:00 月～金 10,151 ドル 2/3 8:30～2:00 月～金 10,402 ドル 4/5 8:30～2:00 月～金 10,402 ドル
実習生	短大1年生	大学生、大学院生1～2年生
実習単位	2単位(2週間)	科目中に含む
実習時期	1年後期(8月末～2月末)2週ずつ6回(平成17年度まで) 6月2週1回(他大学)2～3名、その他	秋学期 春学期 各クラス
1クラス当たりの実習生数	1～2名	3～5名
実習期間	毎日(2週) 通算12週	週3回 午前8:00～12:00(または12:00～17:15)
関連科目	「教育実習の指導」 1年前期演習2単位 「教育実習」 1年前期～後期(8月～2月) 実習2単位分	「初期教育の理論と実践」(Theory and Practice of Early Childhood Education) 秋学期(8月～12月)1-1.5クレジット・アワー 春学期(1月～5月)1-1.5クレジット・アワー 内容: ア 初期教育カリキュラム理論の概説 イ 期末試験、 ウ 付属学校教員の指導のもとで保育者の一員として携わりながら、その中で理論を適用する実践研究 エ 週3日半日ずつの日常保育の実習と反省 オ 基礎理論の講義(毎週1回75分)
実習日誌	第2週めのみ毎回(子どもの様子・保育者の様子・気がついたこと)、1週めはレポート	毎回(状況・問題・問題への対応・考察)
実習内容	1週目 観察・参加実習 2週目 参加・担任実習	主任教師の監督の下に幼児を保育する

反省会	毎日	毎回(昼食時・保育終了後)
実習課題	1週目 実習レポート(毎日) 2週目・部分担任1回(指導案作成) ・実習日誌の提出	①事例研究・報告書作成 ②プロジェクト研究(2週間割り当てられる。その間に自分のプロジェクト保育を遂行する。)

いわゆる「4歳児」(年中児)は日本より一足先に「就学」(日本の場合は「5歳児」(年長児)クラス進級)することになるが、反対に12月～3月生まれの「4歳児」は日本より5ヶ月遅れて「就学」することになる。したがって本章で述べている幼児の年齢は前年12月生まれから当年の11月生まれの児童の年齢を示している。

日本の幼稚園との大きな違いの一つは教師の勤務形態にある。プリスクールの場合は午前と午後主任教師が分かれており、教師の勤務時間は8:00～14:00、12:00～17:15である。初等部では体育、音楽、美術は専門教師にゆだねられている。校長、学童保育教師は専任で、他に事務職、用務員がいる。教員はすべてM.A.取得者である。

入学者は地域の多様性を反映させるために性別、人種、経済階層などを考慮して決定される。また特別な支援を必要としている子どもも入学できるように配慮されている。そのための授業料減免措置があるという。

2、保育観察記録の整理とまとめ

筆者は2004年9月と2005年4月の2回にわたってMCCSを訪問し、主として年少幼児クラスにおいて観察をおこなった。以下はその記録の一部である。

2004.9.17(金)

8:20a.m.

初めてMCCSを訪ねる。2000年に新築された建物は2階建てのプリスクールと1階建ての初等学校棟が屋根つきのテラスでかぎ型につながっている。教育学部棟と同じオレンジ色の屋根と白い壁が明るい陽光に反射してまぶしい。建物の反対側に

はそれぞれのクラス専用の園庭がフェンスに完全に囲まれて続いている。プリスクール2階のゼラニウム・クラスが道路に面しており、1階へは階段を下りていくことになっている。建物の南側にある階段を下りるとテラスの右側にプリスクールの入り口がある。ドアを開けると廊下がコの字型に続いている。右側に大人用のトイレ、左側に家庭にあるものとよく似たキッチンがある。突き当たりは乳児クラスの保育室、その手前右に乳児クラスの主任教師のオフィスがある。乳児クラスの左隣りが年少幼児クラス、左に曲がると年長幼児クラスがあり、いずれの部屋にもドアの隣に大きなマジックミラーが付いており、そこから室内のほぼ全体を見渡することができる。ミラーの前には棚があって、連絡ボードや学生のドキュメンテーション・ファイルが何冊も並べられている。ボードには前日の活動報告やおやつの内容等が記されている。またどの部屋にも9平方メートルくらいの主任教師のオフィスが付属している。オフィスには教師の机と書棚、テーブル、椅子等があり、学生とのミーティングの際にも利用されている。コの字型のくぼみの部分にはキッチンの隣にリズム等の時間に使用される独立した教室がある。廊下を一巡してもう一方のドアを出るとテラスとつながっており、右側にMCCSのオフィスと校長室がある。その奥は図書室になっている。オフィスの隣は階段を挟んでキンダーガーデン・グレード1クラス、その他の初等クラスが続いている。階段をさらに下りると芝生の広い校庭がゆるい起伏のままに続いている。

8:30

年少幼児クラスの部屋に入るとすでに3人の実習生(ここではスチューデント・ティーチャーと呼ばれている。)と主任教師(ヘッド・ティーチャーと呼ばれている。)が打ち合わせをしており、その後教師たちはそれぞれの部署で環境構成を始めた。6人掛け4個ほどの幼児用丸テーブルにモールやカードなどの教材を並べたり、おやつ準備、庭では砂場の掘り起こしなどが行われた。

この日は主に主任教師の動きを追うことにする。最初の園児が母親と一緒に登園してきた。やがて次々に園児が登園してくる。この日はまだ新年度が始まって1ヶ月にも満たない。しかし、表情が少し硬い幼児は見られるものの、大泣きするような幼児はいず、園生活は順調にスタートしているようである。それにはいずれも保護者がゆったりと子どもに付き添い、ときには30分近くも子どもと遊んだり、子どもの遊びを静かに見守ったりしている姿が大きく影響しているのではないかと思われた。保護者はその間に教師や他の保護者とも気軽に会話を交わしており、親密度を高めているようである。教師も必ず登園した園児やその保護者と会話を交わしている。

S男は登園するとすぐカーペット敷きの積み木コーナーへ直行し、大型積み木を積み上げだした。傍に母親が座ってその姿を見守っている。近くにいたJa男に主任教師が積み木をやりたいかどうかを尋ねる。Ja男は無言で庭の方へ移る。教師はしばらく庭へ目をやったあと、S男に積み木を2,3個手渡した。それから、絵本コーナーから建設作業を描いた絵本を持ってきて「チェックしましょう。」と言い、絵本のページを開いて床に置く。S男は母と二人で床に座り、その絵本を眺める。そして母と小さな声で何かを話しながら絵本のページをめくっている。

S男はさらに主任教師と何か話したあと、長い板を運んできて、3枚の板をかみ合わせてつくった3角柱の積み木の間にそれを渡そうとする。教師は絵本の中の「クレーンで土を掘っている場面」を開いてS男に見えるように（だろう）床に立ててやる。

その後主任教師は他の保護者と何か話したあと、庭の入り口で遊んでいる幼児にミニチュアの動物を渡す。

次に主任教師は登園したばかりのM子と話す。M子は持ってきた絵を主任教師に渡す。家で描いてきたものらしい。主任教師がさらに新たに登園してきた男児とその父親らしき人と話していると、つかみ合いを始めそうになった子がいたのでその子の手を引き庭に出る。2,3人の幼児がそのあとをついていく、庭は細長く、ゆるい起伏がある。平たい部分にはウッドチップが敷き詰めてあり、その上に滑り台のついた大型遊具が設置されている。小さな丘の上には並んだ樹木にハンモックが掛けてあり、その下には分厚いマットが敷いてある。中間部分に枠で囲まれた砂場と取水栓がある。奥には温室らしきものが見え、ガラス越しに鉢植えやバケツ、遊具等が見える。フェンスの脇には草花やハーブの植え込みがある。子どもたちの名札を刺したひまわりの苗の鉢も並んでいる。

9:00

幼児のほとんどが登園した。主任教師はJe男の手を引き、保育室の一角にあるバスルームでしゃがんで紙オムツを替える。隣でJa男が手を洗うが、まだ流水に手をあてて濡らすだけだ。

登園したものの、まだ遊びを見つけられない様子の幼児もいる。主任教師はテーブルの前に座ってF子を膝に乗せ、幼児たちのモールつなぎやカラーペンを使ったお絵かきを見守っている。室内にいる他の幼児はビーズ通しや粘土の型押しなどをしている。絵本コーナーのソファに座って絵本のページをめくっている幼児もいる。

K子が主任教師に糸に通したビーズを見せにきた。教師はF子を膝に乗せたままそれを手にとって輪を作り、K子に渡す。

それから主任教師はおやつテーブルの上のホットプレートから湯気が出ているのを見ると、プラグを抜いてプレートを幼児の背より高い棚の上に上げた。

その後主任教師はF子の手を引き、積み木コーナーの方へ行く。積み木コーナーでは先ほどからS男とA男が直方体の大型積み木を壁のように彼らの背より高く並べては積み上げている。教師は椅子に腰掛け、F子を膝に乗せて二人の作業を見守る。

A男は積み木に橋を架けたいようだが、板が具合よく架からず苦心している。教師が板の片方を持ってあげるが、A男は橋げたをイメージ通りに作れないのか一生懸命考えている様子。Ja男が積み木遊びの中に入ろうとしたら教師は制止し、自分の片側にJa男を引き寄せてそのままA男の様子を見守る。主任教師がA男に何かを話しかけるとA男は他のスチロール製らしいブロック積み木を取りに行く。そして板を積み木に斜めに立てかけ、ブロックを板の上から滑らそうとするが、手が届かず、ブロックは床に落ちてしまう。

9:30

そこへちょうどこの日は避難訓練の予定だったのか、校長が鈴をチリンチリンと鳴らしながらゆったりとした歩みで保育室へ入ってくる。教師たちはすぐ幼児を集め、主任教師が先頭に立って名簿らしきものを脇にはさみ、保育室を出て初等部の裏手の広い芝生に集合する。同時に全児童と教師たちが集まってくる。通りの車の音が騒がしいが、それぞれのクラス名のプラカードを前に整列した後校長が話を終え、約15分後、再び保育室に戻る。

保育室では自由遊びが再開され、主任教師の指示で実習生の一人がおやつ準備を始める。

Jm男とI子が人形遊びのコーナーで縫いぐるみの怪獣を手を持ってパペットのように動かしている。主任教師の声掛けでそこへA男が板を運び、椅子を背中合わせにして背もたれの上に乗せる。主任教師は他の子どもを引き寄せてカーペットの上に腰を下ろした。そして、教師が「私たち見るのを待っているよ。見せてね。」と声を掛けるが、二人はパペット劇場を開演するつもりはないようだ。単に人形のたたきあいを楽しんでいる様子。それをまねする幼児も出てきた。S子が大きな声で「あの子たち、けんかしてる！」と主任教師に向かって叫ぶ。教師が二人に近づき、「たたくのはやめてね。」と話すとも男児二人は人形を離す。板が落ちたので、A男がそれを拾い、元の場所に戻す。

10:00

おやつが始まった。おやつのテーブルは一つなので、早くテーブルについた幼児から実習生がおやつを配る。おやつはクラッカーと手作りのポップコーンに水。ほかの子はまだ粘土をいじったり、絵本を開いたりしている。

S男がテーブルに着こうとしたら、主任教師が引きとめ、さっき運んできた板をまだ元のところに戻していないので戻すように指示した。S男は引き返して、板を積み木コーナーに運んだ後テーブルに着く。(後略)

この後昼食になったら教師たちは交代し、午前の主任教師と実習生はオフィスで昼食をとりながらミーティングをする。主任教師はその後全日保育児の午睡に付き添ったあと、2時で勤務が終了する。

主任教諭の動きを見ていると、さすがにベテランらしくよく目配りがされているし、チャンスを逃さ

ない働きかけがなされている。また、幼児一人一人の自由な活動が重んじられつつも、自分の都合で人の活動のじゃまをしないこと、自分で出したものは最後まで自分で片付けることなどは教師によって明快に子どもに要求されていた。

それに比べれば、実習生の動きはやはり自分の周りに集まってきた子どもたちに注意が集中しがちであり、自分の計画の遂行が一番念頭にあるように見えた。これは日本の実習生とさほど変わらない、むしろ同様の態度であると思った。

3、学生の実習内容

前記「初期教育の理論と実習」を履修する学生は半年の実習期間中（担当クラスは固定されており、さらに午前と午後のグループに分かれる。）に下記の課題をこなさなくてはならない。³²

(1) 保育記録の作成

学生名、日付、観察日誌には通し番号を記入。記録項目は、「状況」「問題」「問題への対応」「考察」

(2) 学習（実習）目標の設定

(3) 毎実習後の指導会への参加

(4) 事例研究の遂行と報告書（A4版3-4枚）の作成

報告書には「取り上げた理由」「事例」「同級生による批評とカンファレンスの反映」を記入。事例は「状況」「出来事」「ジレンマ」「考察／解決法」を含むものとする。

(5) プロジェクト研究

(6) 専門家へと成長するための日々の反省と考察

以上の6項目のうち、もっとも力点が置かれるのが(5)のプロジェクト研究である。これは実習生が一つの主題を設定し、その主題にそって、一定期間子どもの学びを組織し、その展開を記録し、考察するものである。クラスには複数の学生が配属されるので、割り当て期間は一人2週間とし、順番に行く。進めるにあたって学生は次の点を明らかにしなくて

はならない。

① テーマおよびテーマ設定の理由

② 意義（子どもにとって／保育者にとって）

③ ねらい（子どもへの問い／実習生自身への問い）

④ 役割の取り方（子ども／実習生自身／他の実習生）

⑤ 記録の採り方

⑥ プロジェクト導入時期

⑦ 導入の算段（必要な道具や素材／環境設定案／協力依頼）

2回の訪問の際、筆者は実習生と指導の主任教師の了承を得て下記の事例検討記録といくつかのプロジェクト研究報告書のコピーを入手した。

(7) 事例検討（ケース・アサインメント）

例（学生の報告書の概要）

背景（Context） 年少幼児クラス、2004.9.21（火）9:20am.

状況（Incident）この日朝9:20分ごろ、母親と別れてまもないK子は朝の気分を調整しているように見えた。彼女は親指を口にくわえ、少し疲れているようだった。私はおやつテーブル（まだおやつも子どもたちの姿も見えないとき）の椅子にK子と一緒に座った。K子は私の膝の上に乗ってきて話し始めた。私がユダヤ新年祭と私の通常ワークのため、2,3日留守をしていたので、私たちは関係を取り戻そうとした。私たちは彼女が週末にどんなことをしたか、や見た映画などについて話し合った。K子がちょうど私たちは互いによくあったブルーのシャツを着ていると指差したとき、J夫が私たちの傍に寄ってきた。「僕のヘビのトレーナーを見て」

J夫が話しかけてきた。彼はあきらかに興奮していた。私がどこで手に入れたのか尋ねると、J夫は友達のO夫にもらったと言った。私がO夫とは大人なのか、子どもなのか尋ねたところ、K子がもうたくさんというように私とJ夫の話に割って入った。

「私髪にクリップをつけてるのよ」

私は彼女に顔を急いで自分の注意をJ夫に戻した。私はK子とよく話しているし、一緒にいると落ち着くと私もK子も思っていると感じていたけれども、J夫とはこの年はあまり近づけなかった。彼は他の何人かの教師とは近しくしているけれど、私とはあまり近づく機会を持とうとしていないと感じていた。彼が私に言おうとしていることに私が興味を持っていると私は彼に知らせなかった。（これは話が少しずれているかもしれない？）K子はそのことを知らない。

「私のクリップ。私のクリップ」

K子は歌いながら私の方へ顔を向け、膝の上に乗ってきた。私たちは顔と顔がくっつきそうになった。彼女は私の注意をひきつけ、J夫と私の会話を邪魔するように歌い始めたので、私

は次のように答えた。

「わあ、紫色のクリップを二つ付けてるのね。とっても素敵だね。」

それからまたJ夫の方へ向きを変えた。J夫は歌い続けているK子越しに私の先の質問にこたえた。だいふ考えてから、「O夫は大きいこどもなの」

と言った。私はK子が私の注意をずっと引こうとしている(さっきまでそうしていたのだ)こととJ夫が彼のトレーナーについて話そうとしているのをなんとか同時にこなそうとしてきたけれども、K子とJ夫はどちらも私と話したいのであって、自分たち同士ではないのだ。

J夫は他の友達の名をあげだした。K子は彼女の髪の毛のバレッタについての話を続けたがった。私はどのくらいこのままにしているのか、二人に何をしてあげればいいのか分からずとても困惑して、どうしようもなく、J夫はやがて他のテーブルに移っていった。K子と私は会話を終え、J夫とはその日の後の時間を一緒に過ごした。

この例は私にとって、仲間同士が仲良くなる機会を逃した例として印象的なものである。二人はどちらも私と話したかったのであって、お互い同士ではなかった。だから私は同じ会話のなかでK子とJ夫を結びつけようとするよりも私との会話をどうやって続けるかに意を払おうとした。

考えられる問題

複数のこどもがいるなかで教師と一人一人のこどもとの関係づくりはどうバランスをとるか
子どもたちの社会性をどうやって促進するか

以上はたまたま手にした事例報告であるが、日本の学生の実習においても頻繁に見られる例である。実習生の発想の共通性を考察する上で興味深い事例と考えることができる。

(8) プロジェクト研究

これは「初期教育の理論と実践」のシラバスにある「ウ 付属学校教員の指導のもとで保育者の一員として携わりながら、その中で理論を適用する実践研究」に該当するものである。

プロジェクト終了後はドキュメンテーションと呼ばれる報告書をまとめ、提出する。それらはテーマと学生の氏名、プロジェクト期間を明記した表紙をつけて簡易製本され、常時クラスの入り口近くの廊下の棚の上に陳列されており、誰でも自由に手にとって閲覧できる。内容はポイントが簡潔にまとめられ、デジカメ写真が豊富に使われ、カラフルで見やすい

ように編集されている。特に保護者はわが子が登場する事例が豊富にあるからか、送迎の際によく目を通しているのを目にした。筆者が教員や作成学生の許可を得て、手に入れたコピーは下記のものである。そのなかからいくつかの例の概要を紹介しよう。

① 2004、春学期「乳児クラスのあかちゃんごっこ」(乳児クラス午前実習生)

ヴィゴツキーの発達の最近接領域理論に基づいて、乳児による赤ちゃんの世話遊びや自分が赤ちゃんになる遊びを観察事実に基づいて考察。

結果：子どもたちは毛布でくるんだり、寝かしつけたりなど赤ちゃん人形が大好き。自分が赤ちゃんになって遊ぶのも好き。

劇遊びは子どもの発達にとって重要であり、探究心を育てる(ピアジェ)赤ちゃん人形を使って遊ぶことは子どもたちが遊びを通じて表象的、映像的に考えることを助ける。

赤ちゃん人形との遊びの場に、オムツやハイチェア、ベビーカーなどを用意したところ、違った場面の遊びが出てきた。

子どもたちは赤ちゃんの世話ができることや赤ちゃんになって遊ぶことが好きだとわかった。

わたしは、子どもは赤ちゃんの世話をした経験がないためその種の遊びは出てこないと考えていたが、子どもは周りの状況からよく学ぶのだということがわかった。何より子どもたちは赤ちゃん人形との遊びを良く楽しむし、この遊びでとてもおだやかになるということを学んだ。

② 2005 春学期 「箱庭遊び」(乳児クラス午前実習生)

乳児室にカーテンで仕切ったコーナーを作り二人まで遊べる箱庭を置いた。1日目はカップやスプーンなどのままごと道具、2日目は動物のミニチュア、3日目は家族の写真を砂の中に隠した。4日目はアヒル、鶏、鶉のゆで卵。その中で身体活動や認知行動、社会性の発達を観察、確認し、教育において環境の持つ重要性をつかんだ。

③ 2005 春学期 「家庭や学校での睡眠」(乳児クラス午後実習生)

睡眠については良く知られていないことが多い。子どもたちが毎日お昼寝をするのを見て、子どもたちは眠ることをどう感じているのかを知るために行った。

家庭と学校とで眠っている子どもたちの写真の載ったアルバムをともに見たり親からの手紙を読んでもらったり、お休みなさいやお昼寝の絵本を読んでもらったりお話ごっこをして楽しんだ。そしてお互いの経験がよく似ていることを知った。

④ 2005、春学期「音楽を通しての仲間作りに関する一研究」(年少幼児クラス午前実習生)

これは歌に合わせて止まってポーズをとったり、家で歌っている歌を家族に紹介してもらったり、手作り楽器(紙の太鼓、ダンボールのギター、豆を入れたビンのパーカッションなど)などの活動を通して、子どもたちのコミュニティをつくることをねらいとしたものである。

⑤ 2005、春学期「手作りジャングルへ行こう」(年少幼児ク

ラス午前実習生)

大きな板(1平方メートル以上)に全員で色を塗り、その上に発泡スチロールや木片、粘土などで立木や山、谷のあるジャングルを作る。そこへ模型の動物をおいてお話作りをする。

学生たちのドキュメンテーションレポートは文献等をよく読みこなし、それらの知識に基づいて観察事例を的確に解釈し、よく準備された環境構成によって、自己のプロジェクトを推進していることが十分にうかがわれるものが多かった。

4、MCCSの実習から学ぶもの

MCCSでは、1年間(約35~36週)にわたって毎週3日間午前または午後、毎回4時間程度の実習を行う(ただしクラスは途中で変更されることがある)。これだけで少なくともトータルで420時間程度の実習を経験することになる。日本の場合、4単位の教育実習はおおよそ160時間程度であり、しかも園やクラスが異なる例が多い。保育実習6単位を加えると400時間程度になるが、その実習内容はきわめて広範なものとなる。

また日本の場合、集中実習が多く、その間の指導は実習園に全面的に依存する形をとることが多い。MCCSでは毎週の授業と平行して実習が行われており、担当教授はMCCSのスタッフのメンバーとなっており、プロジェクト研究プレゼンテーション(MCCS教員一人と実習生数名によるグループ別発表会)はもちろん、毎週の職員ミーティングにも出席する。またMCCS教員が交代で講義も担当しており、受講学生は自己の実習と講義内容を関連させて理解することがより容易になる工夫がなされている。

このように、長期間、継続的に同一園で実習するスタイル、実習現場の教師から直接一貫した講義を受けるなど実践と理論がより徹底的に統一されたスタイルは日本においてははまだ一般的とは言い難く、

今後の実証的研究が待たれていると言えよう。

ただ、そのためには実習カリキュラムの内容や単位数の改善、現場教員の研修、時間的余裕の改善が不可欠であり、今後の大きな課題である。

V 長野県短期大学幼児教育学科・専攻科幼児教育学専攻における実習カリキュラム再編の課題と展望

1、日米2校における実習指導の比較とそこから見えてきたもの

先の表5に明らかなように、本学付属幼稚園とMCCSプリスクールの間には保育体制、方法・内容、実習指導体制等に現状では大きな開きがある。

しかし幸い本学付属幼稚園は短大と同じ敷地内にあり、これまでも養成学科教員と付属幼稚園との共同研究を進めてきており³³、課題に対する共通認識は形成されつつあると言ってよいであろう。

また、本学付属幼稚園の教諭、MCCSのプリスクール教諭が相互に互いの園を訪問、観察し合う実績も積んでいる。

ただ、本学付属幼稚園教員の一日の勤務時間はMCCS教員に比べはるかに長く、このままの体制ではとうていMCCSのような本格的な長期実習は組み入れられない。園児、実習生、指導教員いずれにも過重負担にならず、かついずれにもより充実した時間となるような実習カリキュラムの工夫が要請されている。

2、今後の実習カリキュラムの新しい試み

本学では平成16年度より1年制の専攻科(定員30名)を設置し、短大2年間での幼稚園教諭2種免許取得に加えて、新たに専攻科1年を含む3年制の保育士養成を開始した。

専攻科の実際の開講は平成18年度からになるが、計画では、幼稚園免許・保育士資格いずれも取得希

望の学生は学科課程での6単位の教育実習（「教育実習の指導」を含む。）に加え、10単位の保育実習（「保育実習の指導」「実習研究」を含む。）を履修することになっている。

この中で特に保育実習Ⅱまたは保育実習Ⅲのいずれかを選択必修で履修する学生は短大近隣の保育所、福祉施設の協力を仰ぎ、原則として前半は毎週1回の1日実習10回、後半は集中実習10日間を経験する予定である。さらにこの実習とはほぼ平行して演習科目である「実習研究」を新たに開講する。これは3人の教員が3グループに分かれて、学生がそれぞれ経験しつつある、あるいは経験し終わったばかりの実習を振り返り、反省内容をまとめて発表し、その発表をグループメンバー全員で検討しあう場となる予定である。

また、専攻科では実習関連科目とは別個に演習科目として「専修研究」4単位を必修科目として開講する予定である。

この科目は社会福祉、教育学、心理学、表現科目など幼児教育学の全分野に亘って専任教員全員（8名）が担当するゼミ科目であるが、筆者担当の「保育内容論ゼミ」を選択する学生は現在可能な範囲で長期的、一貫性のある実践研究を実施する予定である。

次稿では、本論の知見や課題を踏まえたうえで実施する本学での新たな実習指導について報告したいと思う。

- 1 「姆」という漢字は1946（昭和21）年11月に制定された当用漢字表から除かれたため、以後は「母」という字が使用された。
- 2 氏原銀「女子高等師範学校附属幼稚園ニツキテ」芦屋大学附属図書館竹村文庫蔵
- 3 水野浩志「昭和前期の保育所保育養成」日本保育学会編『日本幼児保育史』第4巻1971（昭和46）p.208～214
- 4 日本保育学会編『日本幼児保育史』第1巻1968（昭和43）p.190
- 5 1907（明治40）文部省令第12号「師範学校規程」

- 6 日本保育学会編『日本幼児保育史』第4巻1971（昭和46）p.196によれば、昭和15年当時保育養成施設の実習時間数は「保育実習は週八時間乃至二〇時間で、一〇時間の乃至一五時間のものが多数」であった。これは他の科目比べきわめて比重が高いものであった。
- 7 （明治23）小学校令、（明治44）小学校令施行規則、1926（大正15）勅令第74号「幼稚園令」、「幼稚園令施行規則」等参照
- 8 1954（昭和29）10.27文部省令第26号「教育職員免許法施行規則」（一部改正）
- 9 藤枝静正著『教育実習学の基礎理論研究』風間書房2001 p.95
- 10 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』第5巻 竜吟社1939（昭和14）
- 11 教師養成研究会編『観察・参加・実習』学芸図書1947（昭和22）p.1
- 12 他に暫定措置として「厚生大臣が特に適当と認定した者」の項目があるが、省略する。
- 13 厚生省児童局長通達第105号「保母養成施設の設置及び運営に関する件」1048（昭和23）
- 14 昭和24年度の資格取得者は養成校卒50名（1.2%）、保母試験合格者4179名（98.8%）厚生省調査より（全国保母養成協議会編『保母養成資料』第5号日本保育協会発行1976.1 p.19）
- 15 1962（昭和37）年の改定のさい「1時間には少なくとも45分以上の実時間を充てること」となっている。（全国保母養成協議会編『保母養成資料』第2号日本保育協会発行1974.11 p.17）
- 16 厚生省告示第328号による。全国保母養成協議会編『保母養成資料』第2号日本保育協会発行1974.11 p.15
- 17 全国保母養成協議会編『保母養成資料』第2号日本保育協会発行1974.11 p.34
- 18 全国保母養成協議会編『保母養成資料』第2号日本保育協会発行1974.11 p.34
- 19 全国保母養成協議会編『保母養成資料』第2号日本保育協会発行1974.11 p.19～26 この措置は1972（昭和47）年度入学者から全面实施された。
- 20 梅田優子「教育・保育実習に関する研究の動向」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第39集2002（平成14）p.59～68
- 21 日名子太郎編『現代保育研究7保育実習』福村出版1968（昭和43）
- 22 坪井貴子著「保育実習における実習生の学びに関する研究—身体技法としての学び」高松大学紀要, 41, 2004, p.27～40
- 23 保母養成のあり方研究会研究報告書「多様な保育ニーズに対応できる保母養成のあり方について—実態調査「いま、保育園（所）長が保母養成校に求めるもの」の分析をもとに—」1997（平成9）全保養 p.47
- 24 パメラ・オハート著、泉千勢監修編訳『ヨーロッパの保育と保育者養成』大阪公立大学共同出版会2004等参照
- 25 岩崎次男編『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学

出版部 1995

- 26 昭和 60 年度厚生科学研究報告『保母の養成と資格に関する国際比較調査』日本児童福祉協会 1987（昭和 62）
- 27 榊瑞希子、クリスティーン・ケイス、ジェイン・ボイヤー 著「カリフォルニア州における保育者の専門性形成—州の制度とミルズ・カレッジの取り組み」『聖徳大学研究紀要短期大学部第 37 号 2004
- 28 長野県短期大学評価委員会編『2004 年度前期授業評価報告書』2004、同『後期報告書』2005 参照
- 29 <http://www.mills.edu/>参照
- 30 <http://www.childlife.org/>参照
- 31 <http://www.mills.edu/>参照
- 32 脚注 26 に同じ
- 33 立浪澄子他著『保育カリキュラムをつくる はじめの一步—長野県短期大学付属幼稚園の実践』新読書社 2000